

## 卒業式でマスク外さないダメ？ 文科省方針に子どもたち戸惑い

2023/2/16 北海道新聞

卒業式でのマスク着用についての文部科学省方針
児童生徒、教職員
●マスクが不要な場面
入退場、式辞・送辞・答辞、卒業証書授与
●マスクを着用する場面
国歌・校歌の斉唱や合唱、複数の児童生徒による「呼びかけ」
保護者、来賓
・マスクを着用 ・座席間に触れ合わない程度の距離を確保した上で、参加人数の制限なし
留意事項
基礎疾患などさまざまな事情で感染不安を抱き、着用を希望したり、健康上の理由で着用できない児童生徒もあり、着脱を強制しない

文部科学省が今春の学校の卒業式で「マスクを着用せず出席することを基本とする」との方針を決め、函館市内の学校現場や子どもたちの間で戸惑いが広がっている。子どもたちには、受験を控え、インフルエンザへの警戒感から、この時期にマスクを外すことに抵抗があり、「できれば着けていたい」との声が上がる。学校も着脱についての指導に頭を悩ませている。

### ■「受験生だから不安」「家族にうつす心配」

「体調管理に神経質になっている受験生は、マスクをしていない人を見るだけで不安になってしまう」。3月1日に卒業式を控える函館中部高3年の野呂胡桃さん（18）は、式後に

大学入試に臨む友人も多く、式でもマスクは着用したいと考えている。

政府はマスク着用を3月13日から個人の判断に委ねる方針を決定。文科省は今春の卒業式について、日程にかかわらず、合唱や複数人の呼びかけの場面を除き、マスクを外すことを原則とする通知を各地の教育委員会に出した。函館市教委も15日付で同様の内容を各学校に通知した。

通知では基礎疾患などさまざまな事情でマスク着用を希望する児童生徒もいるとして、着脱を強制しないことも求めており、北昭和小の若林慎也教頭は「3年間でマスクが習慣になり、外すことをためらう児童もいる。実際にどのくらいの児童が外すのかは分からない」と話す。旭岡小の後藤昌樹校長は「突然『外して』と言われれば不安になる子どももいるのでは」と懸念する。

函館市内の高校3年生の女子生徒（18）は「親しい人なら抵抗はないが、あまり知らない人の前ではマスクを外すのは恥ずかしい」。

函館市内の公立小学校は3月17日、中学校は同15日が卒業式。尾札部中3年の田村渚蒼（なお）さん（15）は家族が高齢者施設で勤務しており、「家族にうつしてしまうのが心配」と話した。

函館市内の小中学校では1月以降、インフルエンザの流行も拡大しており、桔梗中の木谷隆史教頭は「コロナに加え、インフルも怖い時期。年度末に学級閉鎖になると、授業時数が足りなくなる心配がある」と話している。（梶蓮太郎）

### 「マスクなし」卒業式の練習から可能 道教委が見解

●道教委は16日の道議会文教委員会で、来月の各学校の卒業式では児童生徒や教職員がマスクを着用しないことを基本とする道の方針に関連し、練習時も希望者にはマスクの着用を求めない考えを示した。

少しずつマスクを外す環境に慣れたい児童生徒に配慮した措置。道教委は「練習でマスクを外す時間を徐々に増やす」などの対応例を挙げた。合唱時など着用が必要な場面では

マスク着用を推奨する。

一方、基礎疾患や受験を控えた感染への不安など、マスクの着用を希望する児童生徒がいることを踏まえ、「マスクの着脱を強いることのないよう留意する」などと説明したリーフレットを各家庭に配布していることも報告した。

中沢美明・新型コロナウイルス感染症対策担当局長は「マスク着用の有無による差別偏見などがないよう指導する」と述べた。（光嶋るい）

「スマホを操作するのもつらく、病院探しは大きな負担だった」。新型コロナの後遺症に2年以上、悩まされている大阪府の大学院生の女性（26）は、そう振り返る。

感染したのは2021年1月。高熱は数日で治まったが、ひどい疲労感でソファから起き上がれなくなった。頭にモヤがかかったような感覚で、不眠や吐き気など複数の症状があった。

府外から引っ越してきたばかりで、かかりつけ医はいない。大阪府が後遺症に対応する医療機関を公表するようになったのは同12月で、女性が探した当時は参考にできなかった。

保健所に紹介してもらった医療機関10か所近くに電話したが、「後遺症には対応していない」と断られた。仕方なく自分でネット検索し、数日後に東京のクリニックのオンライン診療を受けた。今も倦怠感などが残り、大学院を休学して、知人から紹介された大阪市内の別のクリニックに通う。

女性は「住んでいる地域で受診しやすさに差が出ないように、自治体は医療機関の情報をもっと出してほしい」と訴える。

大阪市の会社員男性（48）も、女性と同様の経験がある。20年11月に感染後、頭痛や下痢が続いたため、ネットで見つけたクリニックを訪ねたが、「かかりつけの患者しか診ない」などと言われた。男性は「どうしたらいいかわからず、パニックに近かった」と話す。仕事は感染して以来休んでいるという。

現在受診している堺市の邦和病院もネットで見つけた。1600人以上の後遺症患者を

受け入れてきた和田邦雄院長は、治療経験をまとめた本を1月に出版。「症例を共有し、対応できる医療機関が少しでも増えれば」と語る。